

道德実行の効果

望月幸義

目次

- 一、序
- 二、モラロジ―の意味
- 三、さまざまな効果について
 - (一) 効果の分類
 - (二) 短期的効果
 - (三) 短期的効果についての理解が不十分であった理由
- 四、精神的効果について
 - (一) 個人の精神的効果一般
 - (二) 最高道德の理解、実行が深まる
 - (三) 感化力
 - (四) 偉大な効果

道德実行の効果

我々が何か行動しようとする時、必ず目的をもち、その目的地にたどりつくための方法を考え、実行する。たとえば、サッカーというスポーツを行う場合、その目的は、試合であれば、勝つこと、サッカーをすることの喜び、身体をきたえることなどが考えられる。そしてサッカーの技術を向上させるための方法として、よく練習をしてボールを扱う技術を向上させたり、体力の強化を行ったり、先輩のアドバイスや他のチームの練習法などを学んだりする。また、生け花を学ぶ場合には、その目的は、花を美しく生けること、創造の喜び、部屋を明るく

し、他人に喜びを与えることなどが考えられる。生ける技術を向上させる方法として、先生について実際に練習すること、他人の生けたものを見ること、生け花の本を読むこと、日々花や美しいものに関心を深めることなどがあるだろう。いずれにしても我々が何かの学習をする場合、その目的も方法も割合はつきりしており、自分が積極的にそのことに取り組んでいる場合、その能力、技術の進歩向上もわかる。

さて、モラロジーとか最高道徳の場合はどうだろうか。目的も方法も他のものに比べてはつきりしていないことが多いのではないだろうか。極端な場合は、何かサッカーのゲームを観客席で見ているように、他人が道徳を実行するものと考えていることだっただけであるだろう。どのようなことでも目的、方法、行為等について明確な自覚をもつことが、そのことの向上のために重要である。

道徳実行の目的は何だろうか。品性の完成とか幸福の実現ということがまず念頭に浮かぶ。あるいは現在抱えている身体上、事業上、家庭上の諸問題を解決するためという人もあるだろう。道徳を行うことは人間としての当然の義務だから実行するという人もいるだろう。道徳実行の目的に魅力があればある程、進んで実行したいという気持ちは深くなるはずである。そこでまず、道徳実行の効果について十分に理解する必要がある。効果を求めるのは、道徳に反するという意見もあるが、効果を求めない人間の意識的な行為は考えられない。求める目的や効果が道徳的にみて望ましいものであれば、積極的に求めてよいわけであるし、求めた方が目的や効果をよりよく実現できるのである。

本小論は、道徳実行の効果について考察することがねらいであるが、そのことについて述べる前に、道徳の実行とは何かについて簡単に触れておく。

道徳の実行というと、一般には、具体的な行動を意味するものと考えることが多いだろう。他人に対して親切に行とは何かにして簡単に触れておく。

にしたたり、助力したり、公衆道徳を守ったりすることが道徳の実行であると考えられている。もちろんこれらも道徳の実行であることに相違はないが、最高道徳の特色はその精神性にある。つまり最高道徳の実行は精神で行うことが基本なのである。広池博士は次のように述べている。

「最高道徳はその本質、精神的であるが故に」(『道徳科学の論文』④387 以下同じ)、「最高道徳の特色はただ精神作用のみであること」(⑦37)、「最高道徳においてはかかる形式を踏まず、単に過去における不完全な自己および自己の精神作用を全く最高道徳的に浄化することを意味する」(⑧190)、つまり、道徳および最高道徳は精神的に実行するものである。このことは聖人の思想に共通している。例えば、仏教では、「心は法の本たり。心は心使いを尊ぶ」(『法句経』)、儒教では、「その身を修めんと欲する者はまずその心を正す」(『大学』)と述べられている。

広池博士によれば、最高道徳と普通道徳の区別の一つは、精神的であるか形式的であるかにある。「道徳の質の問題は、結局、形式的と精神的とによってその差を生じるのであります。」(⑧348)と述べているように、道徳は精神的と形式的に分けることができ、普通道徳が形式中心になり易いのに対し、最高道徳は精神を重視するのである。また、「心づかいが天地の法則(神の心)に適えば、行為も適う。心づかい一つにて普通と最高とに分かる」(『広池千九郎語録』188)。従って、最高道徳の諸原理は基本的に精神的に実行するものであるといえる。つまり「最高道徳の全部の実行とは本書第二項に列挙するところの諸原理を精神的に実行するによりて完成されるのであります」(⑩221)と述べられている。

このように、道徳の実行は精神的に行うものであり、それは我々の日常不断の精神作用を最高道徳の諸原理に従って働かせることにある。我々の心は利己的に働き易い傾向をもっているから、それを道徳的に働かせるため

には、意識的な努力が必要であり、よい心が自然に湧き出るように心の習慣を改めることが道德の実行であり、そのようにして習慣となった心の働きの品性なのである。我々の日常不断の精神作用（心づかい）の差によって結果に差が出てくるのである。

二、モラロジの意味

道德の実行は大きささまざまな効果をもたらす。モラロジは道德実行の効果を証明した学問である。道德を実行することによって、幸福の実現、品性の向上、運命の改善、社会の安定、進歩、世界の平和、人類の進化が促進されることを証明した学問である。これを一言でいえば、モラロジは人類の生存、発達、安心、平和、幸福を実現することを旨とした学問である。

従って、モラロジを学習し、最高道德を実行すれば、必ず効果が出るはずである。道德を実行してもまだ幸福になっていないとすれば、その実行が足りないか、実行の方法が誤っているか、何か原因があるのである。

道德の実行は、個人的側面からすれば、まず自己の利益になるものである。すなわち、「道德の実行は結局自己自身を益するものである」(①14)、「今日においても、究竟するところ、道德は自己を益するものであるという觀念が土台となっておるのです」(③125)と述べられている。従来、道德は自己を損し、他人に利益を与えるものと考えられ易かったが、広池博士は道德の実行こそ最も自分に利益を与えるものであることを証明した。つまり、次のように述べている。「道德そのものの本質はこれを行うものは積極的利益を受け」(⑦3)、「道德実行者の受くるところの報酬は、その相手方及び第三者の受くるところの報酬より更に大なることを証明する学問及び教育これなき故に」(①序85)。

『道德科学の論文』には、道德の実行は効果があることを示す言葉が至るところに出ている。たとえば、「好結果」、「良結果」、「道德実行の報酬」、「善悪の報酬」、「道德を実行するものに幸福あり」(⑦46)、「人心開発救済の効果」、「新たな好運命を開く」(⑨21)などである。

しかし、モラロジを学ぶ人々の中には、道德実行の効果について述べることに對しては抵抗をもつ人がある。道德は本来効果を求めるものではないし、効果を求めて道德を実行すれば、それは道德ではなくなるというものである。ここには、広池博士が批判した、カントなどの道德実行の動機を重んじる立場の影響があるといえるだろう。このような考え方は正しい考え方でもあるが、同時に、ここには問題もある。

いずれにしても我々が道德実行の効果について消極的に考える大きな理由として、以下のような原因を挙げることができる。

- ① モラロジの原典の記述に効果を求めることを戒めていると解釈される記述があること。
- ② 効果を求めることは道德に反するという道德哲学や常識が浸透していること。
- ③ 自分の道德実行の効果を公言することは高慢に陥り易いこと。
- ④ 自分自身についても、他人の実行についても効果が上がっているとは思えないこと。

これには効果についての理解が不十分なことが原因していると考えられる。

- ⑤ 道德の実行についての理解が不十分であるため、実行が十分にできていないこと。実行ができていなければ、効果があがらないのは当然である。

以下、右の①、②、③、④について述べる。

- ① 効果を求めることを戒めていると解釈される記述

道德実行の効果を求めることを戒めていると解釈できる記述にはさまざまなものがある。「忠誠努力してその報酬を要求すべからず。これを要求する心あらば、その精神及び行為は最高道德の原理に反するが故に」(⑨34)、「もとより道德の実行は報酬を予期するものでなければ」(⑦375)、「自己の努力に対する報酬を要求せぬ至誠心はまず自己の精神をして常に平和且つ安泰ならしめ、次に他人の心に安心を与えて」(⑧268)、「権利は獲得するものではなく、与えられるものである」。「元来、道德を行うてその報酬を望むのはもとより道德的ではないのであり、且つ人間は先天的及び後天的運命に制せられて、たとい道德を行うも、その結果は不幸に終わることもありますから、道德を行うにその結果を予想することは人間を教育する方法として不当であります」(①92)、「自己の行為の結果を予期することは道德上卑しむべき行為」(⑩30)などである。

このように道德実行の効果を求めることを戒める記述もかなり見られるが、同時に、後に示すように、道德実行の効果を求めてよいと解釈できる記述も多いことは当然である。両方とも重要なことであるが、現在の我々の解釈では、効果を求めないという考え方が強くなりすぎていないであろうか。この点に私は問題を感じる。

② 道德実行の効果を求めるべきでないという考え方について

「効果を求めることは道德に反する」という考え方は常識になつているともいえる。これは、従来の道德哲学や倫理学の理論が大きな影響を与えているといえるだろう。例えば、カントによれば、我々は決して自分の利益や幸福を目的として行為すべきではなく、何をなすことが正しいかを考え、それを実行すべきだとされる。カントは「この世界の内においても外においても無制限に善と考えることができるものは善意志以外には存在しない」(『道德形而上学原論』)と述べ、義務を義務のために「行おうとする意志が最も重要であるとしている」。

確かに、自分の道德実行の見返りを要求する心をもって道德を実行することは不純であり、利己的である。つ

まり、これは自分の行為に対して、対等の見返りを要求する心をもっていることが多い普通道德になつてしまふ。しかし、長期的にみて、自分の道德の実行が自分、相手及び社会一般に対して、よい結果をもたらすことがなければ、真の道德にはならないのである。この点、カントなどの動機論の不十分な点である。すなわち、自分の行為がよい結果をもたらすことを十分理解して道德を実行することに意義があるのである。広池博士はこのことを次のように述べている。「道德の本義からいえば、道德は自己が神に対し社会に対して行うべきものであって、その効果の利・不利は問うべきはずでないが、しかしこれを行うても幸福があるかないか解らぬとするならば、これを行うことは全く愚かなことであるのです」(①59)。「しかしながら今後の知識あり思慮ある人々に対して、かかる物理学的原理を無視せる教えを布いて、人間は道德さえ行えばその方法はいつでもよろしい、またその人の末路はいかに成り行くも差し支えなしというようなことのみを説くのでは、聖人は別として、およそわれわれ尋常人中には、これを聴き喜んで道德の実行をなす人は漸次になくなることと考えられます」(①92)。「道德の実行は自利を捨てて利他を主とするにありという教訓があり、他方においては、たとい多少でもかかる教訓を裏書きする事実が存在しておるとしたならば、何をもって楽しんで道德を行うものがありましょうや」(①15)。「およそ自己の道德実行の結果として、たとい全部予期のごとくならざるにせよ、ある程度までは必ず好良なることを証明せられずんば、真に安心して道德を行い得るものではないのです。(聖人もしくは異常心理的人物はこの例にあらず)」(⑩33)。

広池博士は、従来の単なる教訓や道德の理論では、人々に道德の実行を促す力が弱いので、道德実行の効果を示す学問が必要であると考え、モラロジーを樹立したことに注意しなければならない。

次に、道德実行の効果を求めることは功利主義であり、モラロジーでは功利主義を批判しているから、効果を

求めることを消極的にしている面がある。確かにモラロジ―は功利主義を批判している。功利主義とは行為の善悪の基準を個人の快・不快の感情に置き、自他の快樂を増大する行為は善であり、不快を増大する行為は悪であるというものである。広池博士は、「知的もしくは功利的に道徳を行うことは無益の行為」(⑨109)などと述べているように、功利的行為に対しては批判的である。ここで功利的とは利己的とはほぼ同じ意味であるといえよう。利己的行為がなぜ悪いのかといえば、それが一時的には本人の利益になるようにみえても、利己的行為は他人の利害を侵害してまでも、自己の利益を獲得しようとするものであり、結局、自他の利益をもたさないからである。

このような功利主義に対する批判からは、我々は自己の利益を求める行為はすべて悪いものと解釈し易いのである。しかし、ここには問題がある。自己の利益といってもすべてが利己的なものであるのではない。最高道徳の実行は長期的、究極的に自己の眞の利益を実現する学問である。つまり「己利を逮得す」という語ありて、聖人の教えにおいては、自己の最高品性を完成することが自己を利することになる」(⑧411)と述べられている。

この問題はまた、現世利益の問題とも関連している。我々は現世利益を求めることを卑しいものとする傾向をもっている。ここで現世利益としては、一般に地位、名譽、財産、治病、さまざまな念願成就などを意味しているだろう。しかし、我々が通常これらのものを求めていることは否定できないだろう。例えば、カーネギーは一般人が求めている幸福の内容として次のものを上げている。「①健康と長寿、②食物、③睡眠、④金銭および金銭によって買うことができるもの、⑤来世の生命、⑥性欲の満足、⑦子孫の繁栄、⑧自己の重要感」。

我々の日々の活動は、上記のような幸福を獲得するための行為である。もしこれらのものを求めることが否定されているとすれば、そのような教えは多くの人々にとって魅力あるものとはならないだろう。そこで、これらの内容そのものは否定すべきものではないといってよいだろう。ここでもそれらを求める精神作用が利己的であるかないかが問題なのである。

広池博士自身、現世利益に属するものと考えられるものを道徳実行の効果として上げている。既述のように、実質的幸福の内容として健康、長命、開運、子孫の繁栄を上げている。一層具体的な現世利益的な効果の記述としては、次のようなものがある。「社会の地位もしくは財産を得る」(⑧78)、「就職の口も金銭も社会のよき地位もその人の望むがままに得られるのであります」(⑧213)、「まず自己の心に反省してわが品性を造らば、富貴功名も得らるべし」(⑨216)、「最高道徳的品性を完成して、その結果、自然に各自の家業・職務・財産もしくは地位等の増大することをもって、人間生活の本質とするのであります」(⑧190)、「かくのごとき品性を有する人は自然に名譽、利益、財産、社会の高級地位もしくは成功を獲得することができるのです」(⑨299)。

更に、利己的な動機、目的をもってはならないとされるが、これは理想であって、現実には我々の動機、目的には多少とも利己的要素が含まれていることが予想される。換言すれば、最高道徳の実行は自我を没却し、神意に同化することであるが、もし自我を完全に没却しなければ最高道徳にならないとすれば、最高道徳の実行者は極めて少なくなってしまうだろう。「人心これ危うく、道心これかすかなり」といわれるように、実際、道徳の実行に努力している我々の精神作用には、大なり小なり利己的なものが混在しているものと考えなければならない。そこで利己心をもつ我々の動機、目的にも、利己的なものが混入していることは免れないだろう。もちろん、動機、目的、方法などの点で、道徳実行の際、利己心をできるだけ少なくするようにしなければならぬことは当然であるが、実際には、完全な自我没却の状態にはなっていないのである。とすれば、現実の我々の目的意識

には、現世利益的な要素(功利的な要素)が混入している訳だから、上記の現世利益と眞の利益(己利)の相違も相対的なものとなるのである。

要するに、我々の行為の動機、目的を純化していくことが大切なのであり、その途中の過程では多少の利己的、現世的要素の混入は避けられないのである。最初から純粋な動機、目的を要求することはかえって道德の実行そのものを消極的にしてしまう可能性がある。

③ 高慢に陥り易いこと

効果の意味が多様であるため、利己的行為の結果として生じた効果と最高道德の実行によって生じた効果とは表面的には区別がつかないことが多い。従って、表面的な効果だけによつては、その人の道德行為の善悪は分からないこともあるだろう。そこで、道德実行の効果を公言することは、自分が道德を実行しているという意識を伴い易く、高慢に陥る可能性があることは確かである。従って、効果を公言しないことは、本人を謙虚にさせるうえで重要である。広池博士はこの点に十分注意して、最高道德の原理を説明している。つまり道德実行の動機、目的を借財返済におくこと、「人心開発救済の目的は自己の品性完成のため」などにそのことが示されている。

しかし、同時に、我々は効果のあがる行為は積極的に行う傾向がある。効果があがることによつて、道德の継続的実行を促すのである。また、利己心を完全に脱却できない一般人には、ある程度効果を示さないことには、道德実行の動機づけを与えることはできないだろう。ここには、微妙なニュアンスがあり、時と場合に応じて対処していかなければならないだろう。事実、青少年の道德教育は、最高道德の立場からみれば不十分な点があるはずであるが、その段階に応じた教育として適切なものと考えられているのである。

結局、モラロジーは道德実行の効果を求めるものであるが、その求め方は、一般の場合(普通道德の場合)と

異なるのである。その違いの主な点を上げてみよう。

普通道德	最高道德
現世利益(功利的)	己利
直接的	間接的
一時的	長期的、永続的
要求的	要求しない
人爵を求める	天爵を求める
動機目的は自己利益	借財返済、伝統報恩

このことを示すいくつかの例を上げておこう。「最高道德においては、直接に自己の健康・長命・開運・名譽もしくは利益の獲得を目的として行動するのではなく」(⑦5)、「いわゆる利己心の上に築かれたる道德といふは、直接に且つ即時に自己に利益有ることのみ犠牲を払う意味にあらずして、究極において自己を益することに向かつて犠牲的努力を致すことです」(①22)、「成功と幸福の差は、甲は一時的にしてその持続の時間短く、且つ一部分的にして」(⑨136)。

ここで、先に引用した「聖人と精神異常者はこの例にあらず」(⑨33)という表現に注意する必要がある。つまり、聖人は一般人の考えている幸福を超越した世界、現世利益を超越して、神の世界、宇宙的広がりの中で生きているから、道德実行の効果を科学的に証明しなくても立派な行動ができています。しかし、一般人はある程度の効果を示さなければ、道德の実行を促すことが難かしいのである。

本来、我々人間の行為は目的をもっている。つまり効果の実現を目ざしているのである。目的をもたない意識

的な行為は考えられない。その目的の内容が利己的なものであるか、道徳的なものであるかの差があるだけである。広池博士はその遺稿の中で「自己を益せぬもの無効なり」、「人生、一挙手一投足も善報なきことに努力するは愚の至りなり」、「結果を求めざれども、全く効力なきものを信じ行つものは愚なり」などと述べている。このことは、一般人の因果律信仰にも示されているといえるだろう。「善因善果、悪因悪果」という因果律信仰は、人間社会の歴史とともに古いともいえるだろう。例えば、仏教におけるカルマの思想、そして中国における陰陽録が一般民衆に影響を与えてきたのである。

しかも広池博士は、道徳の実行が単に効果があるばかりでなく、莫大な効果があることを種々の表現で示している。例えば、「自己及び自己の子孫に無限の幸福を与える」(⑧152)、「人間の計算以上の幸福」(⑨149)、「偉大な効力」(①序123、②269、③340、⑦194)、「天地を感動させること好結果」(⑦121)、「人心開発救済に尽力する人は、工業もしくは商業を論ぜず、ほとんど奇跡的利益の増加を見つづける」(⑧275)、「大なる運命を開く」(⑦417)、「人力にて及ばぬごとき卓越した効果がある」(⑨97、③381)、「その効果一粒万倍となり、十分なる末広形と永久性とを有する幸福を生ず」(『語録』145) などとある。

なお、前記④については、項を改めて述べる。

三、さまざまの効果について

(一) 効果の分類

効果についての理解を深めることが、道徳の実行を一層真剣にするために不可欠の条件である。ところが、この点従来の効果に対する理解には不十分な点があったのではないだろうか。我々が普通、道徳実行の効果といっ

た場合、次のようなものを考えている。幸福(健康・長命・開運・子孫の繁栄)、運命の改善、成功、天爵を得る、万世一系の家系などである。例えば、「人心救済の効果——健康の法則、長寿の法則、富を成す法則、社会の地位を高むる法則、子孫繁栄の法則、一時的成功の法則、安心及び幸福の法則」(⑧270)、「人間の健康法・長命法・開運法・一家和合の方法及び子孫繁栄の方法と一致するのであります」(⑧410)。「論文」などの原典の記述に示されている効果は大部分このようなものである。ここには、以下私のがのべる精神的効果のすべてが含まれているが、その具体的内容が伝わっていない。そこで、一時的効果や精神的効果について明確にしておく必要がある。

道徳実行の効果は、一言でいえば、人類の生存、発達、安心、平和、幸福の実現であるが、効果はさまざまに分類できるだろう。ここでは、次のA、B、Cに分類し、これらすべてに関係し、より大きな内容をもつものとしてDを考えてみることにしよう。

A 時間の長短の視点から

- ① 短期的効果 安心、楽しみ、心の喜びなど
- ② 長期的効果 健康、長命、成功、信用ができる、万世不朽の家運など

B 目に見えるか否かという視点から

- ① 精神的効果 安心、心の喜び、信用、精神力がつく、感化力など
- ② 物質的、客観的效果 成功(地位、財産、名誉など)、健康、長命、子孫の繁栄など

C 効果が及ぶ範囲という視点から

- ① 個人的効果 上記A、Bの効果の多くのもの

② 社会的効果

他人に快感・満足を与える、家庭や社会の道徳的雰囲気形成、思想の善導、人心開発救済、三方善の実現、永久性、発展性、審美性など

D

人類の進化、発展、万世一系の家系の実現、永久性、発展性、審美性など

効果についての理解が不十分であったことと関連して、効果がなかなか出ないと解釈させるような記述も影響を与えているといえよう。つまり、『特質』には、「学力、才知、金力等をもって立つ人と最高道徳を体得して伝統の原理を守りもって人心の開発もしくは救済を実行する人とは、初めの間はその優劣必ずしも明らかならねど、短きは五年もしくは十年長きも二十年後には両者の安心、幸福の相違は顕著なものであつて」(230)、また、「実質的幸福を一代に具備するに至る人は真に千万人中に一人有るか無きかであります」。このことには、最高道徳の実行が困難であるという次の記述なども関係しているだろう。「真に救済されるまでになる人は暁天の星より少ない」(243)。

以下、本小論では、短期的効果と精神的効果について考察する。これらの効果についての理解が不十分であると考えるからである。

(一) 短期的効果

道徳実行の目的が、最終的には、品性の完成にあるとしても、もう少し短期的に効果が出ないものかと考えるのも人情である。よい効果であれば、早く出た方がよいに決まっている。道徳実行の効果は、短期的な効果と長期的な効果に分けて考えることができ、短期的な効果は、心の喜びが増えることあるいは悩みが減ることである。道徳の実行は心づかいの実行である。自分の心の利己心を減らし、すべてのものや人をはぐくみ育てる慈悲の心づかいを増やすことである。簡単にいえばきれいな心づかい、よい心づかいをすることが道徳実行の根本である。

私は道徳の実行は直ちに効果をもたらすものであることに気がついた。その効果とは心に喜びが増えること、あるいは悩みが少なくなるということである。自分がよい心づかいをした分だけは確実に心の喜びが増えるのである。たとえば、ニューモラルの家庭座談会や研修会に参加して、心がきれいになり、喜びが増え、悩みが減つたという経験をもつた人が多いだろう。センター講座などに参加して、集中的に心をきれいにした人の喜びは格別に大きいのである。

広池博士は、その著書の中では、あまり心の喜びという言葉を用いていない。しかし、短期的な効果を考えていなかったわけではない。それを表す中心的な用語は安心である。また、精神作用の因果律を認めていることは短期的効果を認めていることになる。我々の日常不断の精神作用は常にその結果を伴っているといえる。ただその効果が具体的に表面に現れないことが多いにすぎない。しかし、我々は道徳を実行した場合、直ちに心の喜びとして感じていることも事実である。このような心の喜びの生活、感謝の生活が続けばいろいろと長期的な効果が生まれてくる。つまり、健康になったり、社会的信用が得られ、事業に成功したり、人間関係が順調にいくようになる、というようなことである。

広池博士自身、短期的効果について述べている箇所がある。それは次のように表現されている。「迅速にその効果を収め得るところの方法」(98)、「自我を没却したらんには、その自己の心たちまちに非常に平和となり」(198)、「ひとたび最高道徳を体得せる青年、処女にありては、いかなることもわずかなる時間においてはみなこれを成功するに至るのであります」(382)、「道徳の実行とかの結果は、各人みなそれぞれ異なり且つ若干の日数もしくは年数を経て現るのであります」(240)、「最高道徳を聞いた御方の中にて、いささかこれを実行して若干の効験を認めるとき」(362)、「その平素の一言もしくは一行を累積すれば大なる徳を形成し得るに

至り、僅々の間にその運命は変じて一家喜悅の生活を聞くことを得るのであります」(③382)、「たくさん効果即時に現れてくる」(遺稿)、「人間そのものを尊重する心を造りましたならば、自己の事業も運命もたちまちに一変して、成功と幸福とはその一身を圍繞するに至るでありましょう」(③326)。

次に、短期的効果が心の喜びにあることを示そう。広池博士は心の喜びという表現はあまり使用していない。しかし、その意味に当たるものとして、次のように、「平安」、「心安らか」、「安心」、「心の楽しみ」などの表現を用いている。「自分の精神が平安にして」(③383)、「おのずから実行者の心安らかにして」(⑦6、⑧413、⑧412)、「元来、聖人の教えは人間各自の安心と安寧とを尊び」(⑧37)、「かくて一切の出来事を自然(神)の制裁に任せて安心し」(⑧229、⑨23)、「一時、形の上の安心は出来ても心の底からの安心は出来ませぬ」(⑧408)、「その精神は求めずして安泰となり」(⑦250)、「安心及び幸福」(多数)、「自己の精神もまた平和にして」(⑦90)、「それはただその当事者個人の喜びにとどまって」(⑧391、⑧291)、「最も愉快に且つ円満にその生活を持続しつ」(⑦48)、「精神的に何ら楽しみなきが故に」(⑧55、⑦313、⑦93)、「その精神には世界の人心を最高道徳的に開発して世界の平和と人類の幸福とを實現しようという大理想を有しておりますから、その精神は無限の楽しみを含んでおる」(③383、③382、③360、⑦212)。

楽しみ、喜び、安心の反対は、苦しみ、悩み、不平、不安などである。心の喜びが増えるということは、これらの苦しみ、悩みなどが減ることである。したがって、そのような内容の表現も、短期的、精神的効果を示しているといえる。いくつかの例を上げておこう。「不平を懐くことがない」(⑧240、⑨101)、「心を苦しむるが故に」(③348、③349)、「悲観・煩悶はみな利己主義の欲のためなり」(遺稿)。

広池博士は、人間は喜びを求めものだと考えている。つまり、「元来、人間は、聖人や異常心理の人を除けば、何物かその精神もしくは肉体を慰安するものなくしては生きておられぬものであります」(⑧281)と述べている。広池博士は、明治三七年、奥様にあてた手紙の中で「貧富の間にも、後のたのしみはたくさんあります。おそらく我々のごとくたのしみのあるものはありますまい」と書き、また、「最高道徳の実行者は常に自己を忘れて人心の開発、世界の平和及び人類の幸福を楽しみにしており」(⑨349)、人心の開発救済が最高最大の喜びをもたらすものであるという。これは、広池博士自身が体験したことでもある。すなわち、「現に私は近く約二十年間かくのごとき状態に処して、その精神の楽しきことを体験しておるのであります」(⑧285)と述べている。以上、心の喜びに相当する表現をたくさん紹介したが、ここで用いられている言葉の中心は、「安心」、「楽しみ」である。私はこのような短期的、精神的効果を「心の喜び」と呼びたいと考える。そのほうが現代の人々に理解し易いと考えるからである。安心という言葉には、心の喜びが含まれており、「楽しみ」という言葉は一層心の喜びに近い意味をもっているといえよう。

しかし、広池博士はなぜ喜びという表現を避けたのであろうか。その一つの重要な理由は次の点にあったと考える。それは、喜びという言葉は、安心という言葉に比較すると、利己的な意味が多く含まれていると考えられたのではないだろうか。このことは、「明朗清新」についての説明で喜びを二つの種類に分けていることから推測できる。利己心に合った時の喜びと最高道徳を実行した時に得られる喜びとは、喜びの持続期間、周囲の人々に喜びを与える可能性、さらに大きな喜びを生み出す可能性などの点で大きな違いがある。したがって、広池博士は利己的な意味を含むことが少ないと思われる安心という言葉を選んだのであろう。

しかし、利己心を完全に払拭することが至難の技であるとすれば、喜びの質的相違の自覚を条件にして、心の喜びという言葉を使用することは許されるだろう。

(三)短期的効果についての理解が不十分であった理由

安心とか心の喜びという道徳実行の短期的効果は、日々道徳の実行に勤しむ我々の励みとなるから、極めて重要である。しかし、道徳実行の短期的効果についての理解が十分でなかったことには、いくつかの理由が考えられる。その理由の一部は既に述べたので、ここでは、次の二点を指摘しておく。①安心という言葉から受ける印象、②短期的効果は当然のことであり、広池博士は長期的効果の実現が目的であったこと。

① 安心という言葉から受ける印象

短期的効果が分かりづらかった大きな理由の一つに安心という言葉がある。安心という言葉は、モラロジの幸福観の解釈にも大きな影響を与えた。そこでまず、幸福について述べておく。これまで我々モラロジを学ぶ者は、幸福とは、健康・長命・開運・子孫の繁栄であると理解してきた。これは先に述べた物質的、客観的効果にあたる。しかし、一般に、我々が求めているのは、このような内容ばかりでなく、何よりも精神的喜び、安心である。今日では、幸福とは精神的意味が中心になっているといえるだろう。実際どんなに客観的条件にめぐまれていても、心に喜びのない生活は真に幸福な生活とはいえないだろう。

広池博士ももちろん精神的要素を重要視していた。それが安心という言葉であった。ところが、幸福という言葉とは別に安心という言葉を使用しているため、幸福という言葉の意味が限定されてしまい、幸福の精神的要素の位置が弱いものになってしまったのである。(なお、この点は『モラロジ概説』では修正されている)。広池博士が幸福の精神的要素と物質的、客観的要素の両方を重視していたことは確かである。それは、幸福の物質的、客観的要素を実質的幸福と呼んでいることから分かる。たとえば、「毫も自己に実質的幸福なく」(⑧349)と

いう記述がある。実質の反対は精神であるから、精神的幸福という言葉は使用していないが、実質的幸福という言葉を使用している以上、幸福の精神的内容も考えていたことは明らかである。このことは、広池博士が多くの場合、「おおよそ人間生活の真の味は安心及び幸福にあるので」(⑦405)などというように、安心と幸福という二つの言葉を同時に使用しているにも現れている。

この安心という言葉が短期的効果と理解しづらかったのは、この言葉が与える印象にある。安心という言葉は、かなり精神的に向上し、持続的に心が安定しているという長期的な意味で理解され易いものといえる。もちろん、安心という言葉は、短期的意味よりも長期的意味のほうが強いと考えるのが自然であるが、先に引用したように、広池博士は短期的意味でもこの言葉を使用しているのである。ここでもいくつか引用しておく。「もって神の心すなわち自然の法則に信頼せば、いっそう確実な安心が出来ることと存ぜられます」(⑧419)、「少しの安心もできなかつた」(⑧201)、「それ故に上に立つものみな一日も安心が出来ず」(⑧420)、「生涯一日も安心の日はありませぬ」(⑦401、⑧82)。

② 長期的効果を目的としていたこと

モラロジの原典においては、圧倒的に客観的、物質的、長期的効果の記述が多い。その理由として考えられることの一つは、広池博士は道徳実行の短期的効果は当然のことであり、それよりも重要かつ困難な長期的効果の実現を目ざしていたものと考えられる。モラロジは簡単に生じる効果以上の極めて大きな目的の実現をねらいつているのである。このことを示すいくつかの記述を上げてみよう。

「ここに至って事業に成功すること、富を致すこと、社会によき地位を得ることのときは、実に容易なることであるのみならず」(⑧325)、「人間の永久の幸福享受(健康・長命もしくは子孫の繁栄の類)は学力・知力・

金力もしくは権力のみにて得らるべきものでなくして人間の生活上における難中の至難事業であります」(③324)、「健康・長命それと家運の万世不朽はいかなる財力でも権力でも買得ぬものでしょう」(⑦360)。

このようにモラロジは途方もなく大きな効果の実現を目的にしているのである。それは、既述のように、個人的レベルでは、子孫の万世不朽であり、社会的レベルでは、すべての人々の幸福、社会の安定、平和であり、真の文化の創造、人類の進化である。さらに広池博士は「聖人は天災を免れるか」という問いを発し、免れると結論していることもこのことと関連して注意しておこう。

四、精神的効果について

道徳実行の短期的効果と同時に、我々は道徳実行の精神的効果についての理解を深め、そのことを強調していく必要がある。我々が日々真に求めているのは精神の喜びであるからである。道徳実行の短期的効果は心の喜び、楽しみ、安心などの増大にある。これは同時に、精神的効果でもある。広池博士が精神的効果という言葉を使用している箇所もある(④233)。

しかし、心の喜びといっても、その内容は千差万別である。先に「明朗清新」に関連して述べた利己心にあった時の喜びは別にしても、最高道徳を実行して得られる目に見えない精神上の効果は広く深いものがあるだろう。それについて十分に解明することは困難である。なぜなら、我々の精神生活が向上するにつれて、新しい精神の喜びの世界がひらけてくるからである。したがって、ここでは現在の私に把握できる内容を中心に述べることにできない。

精神的効果の中心となるものは、心の喜びである。これについては既に多く引用したがさらにいくつか引用しておこう。「少なくとも精神的に喜んでその十分の一でも補充していきたい」(⑦128)、「喜んで悔い改むる」(⑧239)、「人間の心に最高道徳がひとたび体得さるれば、自然にその顔色は温和となりて、常に喜色を帯びておるのであります」(⑨347)、「すべての人はみなその精神を安んじて、快き気分をもつようになる」(⑩372)、「感激的に喜んで絶対服従が出来るのであります」(⑦212)、「故に普通道徳を行えばとて、真に我心が楽にならず安心ができず、かえってこの道徳の実行を苦勞する人程、健康を害し、疾病をかもし、短命を促し、一面に味方できれば、他の一面に敵を生じ精神常に平安ならず」(遺稿)。

先に、幸福のことについて述べた際、幸福には精神的要素と物質的、客観的要素があると述べたが、モラロジ―では、この内どちらを重視しているかが問題となる。両方とも重要であることは当然であるが、両者を比較した場合、どちらがより重要であるかという疑問も生じるだろう。この問題は、観点によって回答が異なってくる。たとえば、短期的効果という観点からは、前者のウェイトが大きく、長期的観点からは、後者のウェイトが大きくなるだろう。

また、モラロジ―の特色の一つとして、幸福の物質的、客観的効果を強調している点も見逃せない。これは、世間一般では、精神上の幸福感を強調するだけで、精神上の幸福感を永続させるものとしての健康、長命、開運、子孫の繁栄などの物質的、客観的要素の重要性に気づいていないからである。もっともこれは理論の上の問題であり、日常生活ではむしろ物質的、客観的要素の追求が主体となっており、むしろそのことに問題があることも確かである。

次に、精神の重要性を強調することは、次の点で大切である。

① 物質的、客観的幸福の諸条件がそろっていない人、たとえば子供に恵まれない人、病人、事業に失敗した

人などでも幸福の精神的要素は得られることを示すことができること。また、幸福の物質的、客観的要素を中心に他人の幸福を判断すれば、何らかの欠陥のない人は極めて少ないわけだから、大部分の人が不幸と判定されてしまうだろう。

② 上記①と関連して、イエス、ソクラテス、釈迦などの聖人も精神的幸福は我々以上に感じていたと解釈できること。つまり、このことは、『モラロジ―概説』の記述「このように、聖人は人心の開発救済のために、全生命を賭けて犠牲を払いましたが、自分自身ではそのことが決して苦心でも苦労でもなく、最高の喜びであったのです」(八七頁)にも示されている。

モラロジ―は天爵享受の学問であるが、「天爵は心なり」(遺稿)ともあるように、ここでも精神が強調されている。格言にも「形は苦しみ心は喜び徹底して光を発す」、「喜色面に満ち威ありて猛からず」とある。このように、最高道徳の実行者の理想は「天を楽しむ者」(⑧285)になることである。このように、すべてのことを常に喜びをもって楽しんでできるようになれば、理想に近い状態といえるだろう。

しかし、モラロジ―は精神だけを強調する単なる精神主義ではない。この点は十分に注意しなければならない。このことは、「人間を尊重すれども物質を軽んぜず」、「他人の人格を尊重すると同時に、すべての物質をもあわせ尊ぶのであります」(⑧234)、「精神生活の原理である道徳と物質生活の原理である経済は一致する」などの記述にも示されている。

精神的効果について述べる時、純粹に精神的なものを区別して述べることは困難である。精神的なものと物質的なものは密接に結びついており、両者は厳密に分けづらいうものが多いのである。以下は、精神的な効果を中心として、一部物質的、客観的な効果についても触れることとする。試みに、精神的効果を、次の四つに分けてみる。

- ① 個人の精神的効果一般
- ② 最高道徳の理解と実行が深まる
- ③ 感化力および社会遺伝
- ④ 偉大な力

(一)個人の精神的効果一般

(1)心づかい、態度、行動の変化

最高道徳の実行を継続していけば、精神上、態度や行動上にさまざまな変化が現れてくる。態度や行動が円満になり、慈悲心が増えてくる。「その精神作用及び行動ともに自然的・平和的且つ円満であります」(⑧227)、「かくのごとくにしてその精神の奥に温かい柔らかな優しい且つ永続的な心が絶えず湧き出るようになり、頑固な圭角のある精神作用が漸次になくなり」(⑧226)。

精神生活の特徴としては感謝の気持ちが増えることである。つまり「自己反省してすべてのことを喜んで受けとめ」、新しい感謝生活が始まる。感謝の気持ちは喜びをもたらす源泉であるといえよう。

(2)気質、性格の変化

モラロジ―は品性完成の学である。品性完成とは、全人格の変化、根本的改造を意味する。つまり「いわゆる人心開発救済によりて人間の精神を根本的且つ全部的に改造すること」(⑧194)と述べられている。これは我々の性格や気質を変化させることと深い関係をもっている。利己的な心づかいの分量を減らし、慈悲の心づかいを

増やしていくにつれて、性格そのものが変わっていくのである。「いかなる気質の人も、当該最高道徳より見れば同一の気質を有する人と見なすことができるように変化してくるのであります」(⑧335)、「かくのごとき種々の良感化及び好影響はその人の先天の気質を改善し、更にその運命を根本より改善し得るに至るのであります」(⑧336)、「自分の性を立てかえるのが最高道徳であり」(『語録』一二九頁)。

(3) 他人や周囲に良い影響を与える

感謝と喜びの精神と態度は他人に快感と満足を与える。また、その人の周囲は温かい雰囲気が生まれるから、その人の家庭や家の空気まで自然に平和の雰囲気をかもしだすようになる。「直接関係者に安心を与える」(⑧240)、「よくその接触する人に対して満足と快感を与えるのであります」(⑧246)、「温情春のごとく善人敬慕」(⑧348)、「その人の住する所はその空気おのずから平和且つ温暖にして、そこに入り来たるものまず一種いへからざる好感を生じて安心するのであります」(⑧372)、「しかるに、いま真に最高道徳を体得せる人は他人に対してその人を救済したいと思うほか、自利の心がありませんから、その最高道徳を修行するもの身辺は和氣藹然として、春のごとくいかなる未知新来の人も、たちまちにまずその心柔らぎて、一種の安心を得るに至るのであります」(⑧228)。

(4) 信用を得る

最高道徳の実行は他人や社会から信用を得るようになる。「漸次に自己の品性が高まり、権利が出来、信用が重くなり、だんだん社会の地位が上がってきて」(⑧107)、「最高品性が出来ましたならば、その上の人よりは愛せられ、下の人よりは敬われ、すべてその関係者より信用せられ」(⑧348)、「はじめて自分の真の信用が出来るのであります」(⑧244)。

(5) 普通道徳の実行が進む、またより正しい判断ができる

「これの中に誠あれば、外に形あから」(『大学』、⑧175)と述べられているように、心にあるものは、顔つき、言葉づかい、態度などに現れるから、心の中に最高道徳的精神が満ちてくれば、おのずから普通道徳の形の実行もよくできるようになり、他人に快感と満足を与えることができるようになる。

我々は欲があるから他人の精神が分からないのである。そこで利己心が少なくなれば、より客観的な判断ができるようになる。「いかなる問題に対しても自己に私心さえなくば、毅然として確実なる理解と判断を得ること容易であり」(⑧6)、我々がひとたび無我の精神になれば、世界の見方が一変し、物事の本質を正しく客観的に見ることができるようになるのである。

同様に、考え方が明るく、積極的、肯定的、建設的になっていく。自分自身の心に喜びや感謝の気持ちが増えれば、すべての物事に対して、その明るい面、良い面、建設的な面を見ることができるようになる。このよくな心づかいが自然の法則にもかなうのである。「正統の学問は必ず秩序的・漸進的・建設的」(⑧31)、「個人の幸福・国家の富強及び社会の平和を図ろうとするのであるから、樂觀的・質素的・進歩的・實際的にして且つその行為の結果に関して確実性に富んでおるのであります」(⑧384)、「すべて進歩主義で且つ活動的努力的樂觀主義です」(遺稿)。

(6) 知識などの力を有効に活かす

正しい心づかいが多くなれば、自分が現在もっている知識や技術をよりよい仕方でも有効に使用することができるようになる。これは莫大な効果といえるだろう。同じ知識や技術でもその使われ方によって大きな相違が出るのである。社会には、知識が多いために苦しんでいる人も少なくない。正しい心づかいは知識と技術に方向を与

えるものである。つまり、それまで使われていなかった知識や技術を使うようになったり、それほど有効につかわれていなかったものを有効に使用するようになる。同時に新しい知識や技術を習得しようという気持ちも強くなる。

「たといその学力・知力・金力もしくは権力は少なくとも、その力の全部を最高道德的に働かせる場合には、その人より更に偉大なる力を有するものがその力を普通道德的に働かするよりは、その効果が大きいのであります」(⑧329)、「ひとたびこの最高道德を体得する場合には、当該最高道德の本来の性質上、学校教育における哲学・科学その他の学問上の知識を超越したところの高尚且つ深遠なる知識を生じ来たりて、巖然たる一大学者となり得る」(⑧325)、「終極に至れば、かの大学を卒業してその力を普通道德的に行使するものより優るに至ることは疑いないことであります」(⑧330)、「人間に最高道德的至誠の心が起こったならば、その知力のごときもたちまちに大いに増進して、学問・技術もしくは事業完成の計画等著しく前日と異なるに至り、全く別人の感をなすに至るのであります」(⑧382)。

実際、心の立て替えは一つの新しい生命であり、我々の一切の力を新しい方向に転換するのである。このような人の精神活動は極めて積極的になる。広池博士も「心機(こころのはたらき)旺盛にして世を救うを楽しみとせず」、「その精神作用は極めて旺盛にして、言語明白、音吐朗々、姿勢端正、意気天地を包容するの有様があります」(⑨349)と述べている。

(7) 三方善

最高道德の実行は自分に利益があるばかりでなく、相手にも第三者にも利益を与える。つまり三方善をもたらすのである。「自他及び第三者の全部の利益」(①序110)、「三方の幸福」(⑧213)、「行為の結果もまた必ず良

好にして相手方及び一般社会を利し」(⑨29)、「自分と相手方と第三者とともどもに永久に安心して進み得る真の方法」(⑧432)、「人間の行動は道德的に行はじめて、これを行う人にも、その相手方にも、第三者たる社会にも価値あるのに反して」(⑧113)、「自己の行う犠牲の結果が自己と相手方と社会との三方面に利益もしくは幸福を与うる」(⑦120)。

(8) 社会本位、国家本位の行動

最高道德の実行が進めば、見方、考え方がだんだん大きく、広くなっていく。最高道德の実行が深まるということは、自分の狭い利己的な世界から脱却して、より多くの人々を愛し、育てることができるようになることである。従って、より大きな世界で生きるようになる。つまり、政治、経済、社会の問題についても一層多くの関心を持ち、社会に貢献していこうという精神が増えてくる。これは真の社会性が身についてくることともいえる。

「個人の品性の完成は、同時に国家の保存・統一及び完成に向かって尽力することを意味するのであります」(⑧87)、「自己の品性完成と国家の統制完成とはまさに同一の原理によるものであり、且つ同時に成就さるる意味になるのです」(⑧87)、「真に救われた人は一般社会の人々及び一般社会の生産的業務に対して、その幸福と発達とを心から希うのです」(⑧234)、「その道德は社会本位 国家本位且つ人類本位であって」(⑧386)、「故に最高道德にて救済されたということは道德的且つ人道的精神をもって一切の事を社会本位もしくは国家本位に置いて努力する」(⑧234)、「いかなる場合にも道德に立脚するものついに克つべく且つその道德は国家的及び世界的なるものついに克つ」(⑨110)。

しかも、自己自身を超えた大きな目標のために献身する人には膨大なエネルギーが出てくる。したがって、ある団体の幹部に真に救われた人が一人いれば、ついにその団体全体が救われる日がくるのである。

(二) 最高道徳の理解、実行が深まる

最高道徳の実行を累積することによって、自己の不完全な精神作用や自我（利己心）に気づくことが多くなる。その結果、より正しい心づかいの法則をもとめるようになることも自然である。これは、常に謙虚によりよいものを学ぶ態度である。

自分の精神の向上を妨げているものは、自分の考え方が正しい、自分は偉いという高慢な心である。例えば、「上流の人は、たいいてい学問もしくは知識を有するが故に、自尊心ことに強くして、自己及び自己の家族をもって完全なる人間と誤解し、聖人の教えのごときはほとんどこれを顧みぬ有様があります」（⑨169）と述べられている。

ところが、道徳を実行すれば、聖人の偉大なことがますます分かり、それに比べて自分の考えや行いの至らなさ、愚かさに気づくのである。聖書の「心の貧しい人は幸いである。……心のきよい人は幸いである。かれらは神を見るであろう」はこのことを意味しているのだろう。すなわち、このような人は品性の向上に一層励むのである。

我々の品性が向上するにつれて、最高道徳の理解も深まってくる。このことを、広池博士は「たとえばいかに道徳の話聞いても、道徳を自ら体験したことのない人には、その道徳の話の意味が悟れないであります」（②147）、「六十歳を超え、名譽や欲から離れてくるようになると、本当の最高道徳の知恵がわき出してくるようになる」（『語録』一九七頁）と述べている。

(一) 最高道徳の実行が深まる

最高道徳の実行を累積することによって、精神の奥に深く、柔らかく、優しい心が絶えずわき出てくるように

なる。「心を治むるときは、……子諒（まこと）の心油然（ゆうぜん）として生ず」（⑨139）、「ここにはじめて「孝は百行の基」ということになるのであります。およそ人間がかような精神になれば、いずれの方面もしくはいずれの人に対しても、愛情が出来ますから、その孝心一つが実にすべての道徳の基になるのであります」（③78）。

同様に、「いかなる事をも自己に反省して感謝生活を続ける」（⑧244）と述べられているように、自己反省の心が充実してくる。困難に直面しても、それを感謝し、喜び、積極的に受け止めることができるようになる。困難を「神の自分に対する恩寵的試練として、喜び且つ感謝して」（⑦111）受け止めるのである。自分の困難を自己に反省して、ますます至誠に向かって進んでこそ、自分の徳ができ、他人の心を救済することができるのである。

広池博士自身、このような方法で、困難に対処してきた。「しこうして私のごときも年来人心の開発及び救済の事業に従事し、その間しばしば困難の極度に陥ったことがあります。その場合にはかかる聖人の苦勞を回想して自らその心を慰安しつつ今日を致しておるのであります」（⑧277）、「今幸いに大患に罹って生死の間に彷徨するに」（⑧267）、「されば、自己の行うところの人心開発救済に関して、たといいかなる事あるも、泰然自若として安心」（⑧280）しているのである。

つまり、苦樂を超越して、ただひたすら最高道徳の精神を実現しようと努め、「日に新たなれば、日に新たにしてまた日に新たなり」（⑨119）の道を歩むのである。

(2) 神、聖人を求める

我々の日常生活においては、聖人の書物もあれば、テレビ、新聞などで聖人に関する報道がたくさんなされて

いる。しかし、こちらにそれを求める心がなければ、それを見ることは少ないだろう。つまり、それらは存在していないのと同じなのである。ところが、こちらが道徳の実行を深めていくにつれて、聖人の事跡、思想、道徳を求めるようになる。

最高道徳はまず自我を没却し、神意に同化することを旨とする。神意に同化するためには、神の意志(心)を知らなければならぬ。つまり、自分の精神を神の心に一致するように改めなければならぬ。「天命に安んじて神に信頼すること」(⑧232)、「神を信じる」(⑧198)、「神にすがることが生じてくるのであります」(⑧252)、「悔い改めとは、神に従い神に合致するように全生命を一変すること、すなわち神に関する見方及び神に対する態度を根本的に完全に改革することを意味する」(⑤105、ヘイスティングス)。神を求めることは我々人間の根源的欲求であり、我々が神を認めるようになるのは聖人を通してである。

モラロジ―は天爵享受の学問であり、そこでは神、聖人、至誠慈悲のある人という位がある。モラロジ―はこの天における地位を上ろうとするものであり、我々が品性を向上させ、聖人となり、神に近づこうとするものである。広池博士によれば、人間と動物の違いは神を認めるか否かにあるという。そして最高道徳の実行は「人間が動物の域より進化した神もしくはは仏に近づく」(⑦365)ことにある。「われわれ人間が今回新たに最高道徳的に救済せられ、いわゆる動物の境遇から神に近き真の人間に変化すること」、「最高道徳の行為の累積によりて進化した神となり仏となり聖人と仰がるに至ったのであります」(⑦371)、「この人間の精神及び精神作用がひとたび最高道徳的に改造されたならば、その人は神および聖人に近きものに生まれ変わるであります」(⑧322)、「人間を神格化する」(①26)、「人心を開発しこれを救済する事業は、世界諸聖人のつとにこれを実現して自ら神となり、仏となり、もしくはは聖人となって、功徳を人類社会に樹立せられたところす」(⑧152)など

と表現されている。広池博士自身、つねにこのことを実践していたのである。

(三)感化力

道徳の実行によって品性を向上すれば、その分だけ他人を感化する力が出てくる。この感化力が精神的効果の中心的内容の一つである。品性は感化力をもっている。「人間の品性は生きたる人間の精神の表現でありますから、一つの生命を有しておるのであります」(⑧125)、「すなわち当方に真の慈悲の精神があるかないかということはおのずから外部の人に感通するのであって」(⑧372)、「その精神作用が他人に対して柔らかに触れますから、実に美しく且つ力強く、自然にその接する人の心を融和し、更にこれに自発的感化を与え得る」(⑦111)、「その実行者に接触する人々の精神上及び形の上にも種々の大なる良感化及び好影響が現れてくる」(⑧336)、「その至誠はおのずから発して、まず四囲の人心を感化し、ついに延いて全世界に及ぶのであります」(⑧374)、「自分自身の精神を変えたものだけが、他人の精神を変えることが出来、この人生をすべての人にとって苦痛の少ないものとすることができる」(⑤89)。

広池博士自身の最高道徳実行の生命は、『道徳科学の論文』自体も感化力をもっているという。「私の最高道徳実行の生命が、その読者の精神を薫灼して」(①序105)、「モラロジ―の最初の著書たる本書のごときは、その実行者の生命が一字一句の中に生きておりますから万世の後といえども偉大なる感化力を有しておるのであります」(⑧125)。

最高道徳を実行し、品性を向上すれば、他人も自分の心のようになっていたいだきたいと思うのは自然である。道徳心の伝達は品性による感化を基本とする。「自分が救われたということは、他人を救いかけたということであ

る」(②218)、「自分の救われるということはすべての人間を最高道德にて育つる心と実行とが出来たということであるのです」(②247)、「最高道德の実行ということとは、結局、自分の精神が救済されたということになるので、これが同時に他人の精神を救済するということになるのであります」(②196)。「こちらの至誠心が相手の至誠心を引き出す。こちらの至誠が相手に通じて相手の精神が救済されるようになるのである。私どもがもし真に慈悲の心をもって「人心を開発したい救済したい」という至誠が出来たらば、よく他人の精神の中からその人の自然(神)より授かりおとるところの至誠心を引き出すことが出来るのであります」(②380)、「人間の至誠の力は、よく他人の精神の中に潜在するところの至誠心を引き出して、その利己主義を一変し、相手方をして至誠且つ慈悲の人たらしむることが出来るのであります」(②381)。

この感化力は非常に大きな力をもっている。既に述べたように、まず他人に喜びを与えることが自分の最大の喜びになる。「故に先方の救われると救われぬとは別問題として、自分の心の楽しいことはこれに越すものなく、いつも何か心の中が賑やかで淋しいということを感じませぬ」(②281)、「自己の生の機能を徹底的に完成し、且つ自身とその所有物によって最も広い有益な影響を他人の生に与えるものこそは最も富んだ人というべきだ」(②58)、「されば、いかなる場合でも、先方の心を救済しようと思うて行うことであつたならば、それはみな最高道德になるのですから、たといその行為は小なるも、その社会に及ぼす効果は大なるものがあります」(②286)、「いわゆる最高道德を実行する者は、かの北斗星がひとり天の一角に赫々たる光を放っておるようなものであつて」(②243)などと述べている。

(1) 第三者からの報酬

道德の実行は直接相手から報酬がなくても、第三者から思わぬ報酬を得ることがある。「教師は、たとい生徒及び父兄はその恩を忘るるも、後日必ず他の方面より何らか酬いらるることがあつたので多少個人としての慰安は得られておつたのです」(②375)、「最高道德の実行に対する報酬は普遍的にして、たとえば甲に対して行える一つの善行の報酬が、ただに甲より復るのみならず、更に第三者すなわち乙・丙・丁等よりも復つて来るのであります」(②202、②203)、「もしいかなる人にも、ひとたび真に右のごとき改心が出来て、至誠且つ慈悲の精神がわき出でたならば、たとい無一物の人にも、親族・友人その他最高道德の先輩の人々にてこれを援助して、その人を餓死させることはないのです」(②429)。

さらに、人心の開発救済は、自分の子孫以上の精神的子孫を作る。「人心の開発、救済は自分の直接に助けざる人々までが自分の恩沢を感じて渴仰して来たり付くのみならず」(②214)、「真の肉体の子以上の子がたくさん出来て、精神上の楽しみはもちろん、物質的にもまた大なる幸福を享受し得べく」(②377、②282)、「すべてわれわれがその伝統を尊重するときには、初めには上のものに愛せられ安心しつつ出世し、後には下のものに敬われて安心しつつ楽しんでわが子孫(肉体の子孫のみでなくして主に精神的の子孫がたくさん出来ておるはず)の繁栄していくのを見て」(②383、②412)。

そして、人心の開発救済はただ一人の救済でも非常に偉大な結果を生じるのである。「単に一人の開発さるる結果にても、なお、且つ人類の安心及び幸福を実現する階梯となるのであります」(①序123)、「されば、ただ人間一人の至誠は実に尊い価値を有するものであります」(②238、②288)。

(2) 社会遺伝

品性の感化力は、社会全体にも影響力をもっている。広池博士はこれを社会遺伝の法則(②219)と呼んでいる。「精神遺伝もしくは社会遺伝の原理」(②128、②125)、「その至誠が神の力により、おのずから社会の人

心に感応して」(⑧275)、「人間の精神作用がある場合に相互感応するがごとき事実ありとは、古来一般に信ぜられておるところであります」(⑧389)、「その他の精神作用は他人に対してこれと同種もしくは類似の精神作用を喚び起こすものであります」(⑧381)、「かくて社会遺伝的にその精神作用は漸次に広く社会に伝播するのであります」(⑧373)、「人間各個の精神作用もまた相互に連絡しておつて、人間の道徳的精神及び道徳的行為はことごとくその真相が他人の心に映じて親疎の区別を生じ」(①107)、「その精神作用は大宇宙にも他人の精神にも影響ある」(⑨297)。

四偉大な効果

道徳、特に最高道徳の実行は偉大な効果をもたらす。その一端を見ておくこととしよう。まず、道徳の実行は自己の運命を改善する力をもっている。「自己の眞の運命を開く」(⑧129)、「人間の運命の発展の無限なること」(⑦259)、「その極度は、その人の誠意の程度に応じて再びいかなる大運命をも開くことができるのであります」(⑧429)、「自己の運命及び自己の生活は自己自らこれを開拓し且つこれを発達させるのであります」(⑦413)。「広池博士は、大正元年、自己の生命、財産、自由を全人類にささげることが誓つたとき、「私は人間としてこれ以上のことはない」(⑧268)と述べているが、ここには、自己の運命を飛躍的に転換する原理を悟つたという気持ちが見られるだろう。

また、最高道徳の実行は精神の偉大な力を發揮させるものである。「ある人が自己の精神に最高道徳が体得されて、偉大な力が出来るとしたならば」(⑧398)、「個人の内面よりその個人の幸福を膨張させる」(①序122)、「かくして自己の安心はおのずから成立して、健康・長命の要素おのずから具わり、その結果いかなる希望もしだいに達成されるに至るのであります」(⑧415)、「世界に日月あるなし。人民の身の中にみな大光あり」とありて、すべて人間各自の精神の更生にてその身に日月の光を生ずと教えられてあるのです」(⑧297)。「確実に自分の現在及び前途の光明が見ゆるので眞の安心が出来るに至るのであります」(⑧422)。ここには、我々の精神に希望、勇氣、創造力が増大するということも含まれている。

更に、このことは「無より有を生ず」という表現にも示されている。ここにいわゆる「無」とは人間の精神もしくは精神作用を指し、「有」とは物質を指している。「因襲的道徳にても、人間の精神作用を尊び、無より有を生ずることを認めておるのであります」(⑧379)、「現に無より有をさへ生ずるものなるを思わば」(⑧398)、「最高道徳は、一般の人間が神の本質たる慈悲の精神を体得して、無より有を造り出すところの法則であります」(⑧379)。「釈迦は、人間最上の名譽と、財産と、地位と、享樂とを棄て、全く無の境遇より偉大なる有の結果を生み出したのであります」(⑧380)、「たといかくのごとく十分に生まれ更わりが出来ぬとしても、なお且つ、これは非常なる人格の向上でありますから、その運命たちまち開通して、たとい聖人に及ばざるも聖人のごとく無より有を生ずる境域に達することができます」(⑧322)。

同様の意味を表すものとして次のような記述がある。「無為にして他人を化する」(⑨143)、「古代の聖人が無為にして天下の人を感化した」(⑧375)、「黄帝・舜、衣裳を垂れて天下治まる」(⑧377)。

これは天地を感動させることである(⑧260、⑦121)。我々は一般人の思考を超えて、聖人の思想と道徳、事跡を理想とする時、もはや物質的效果への関心はそれ程強いものではなくなるだろう。それ以上に天爵を求め喜ぶは限りがないものである。吾人が右のごとき人生の大困難に遭遇して一步をも前進することあたわざる場合に臨み、全く物質の世界を離れ」(⑧427)とあり、ここに科学的安心立命以上の世界として唯心的安心立

命の世界が開ける。また、これは胸中に黄金世界が開けることである。「自己の胸中に一大光明の天地が開展」(⑦48)、「個人の精神内に黄金世界が現れた」(⑨252)、「現世における極楽世界」(①79)。

そして、これは子孫に万世不朽の幸福をもたらし、人類の創造進化をもたらすのである。「かくてその人の最高道徳的実行は獲得性遺伝のほかに社会的遺伝の法則に基づきて、その人の最高道徳的精神及び行為の結果が、その子孫に一つの善良なる運命として感化を与え、且つその余徳を子孫への遺産とするのであります」(②219)、「自家百年の幸運」(⑧233)、「万世不朽の幸運」(⑧244)、「将来の文明すなわち文化を造り出す」(⑧8)。

ここにおいて初めて広池博士が目指した永久性・末広性・審美性をもった幸福が実現するのである。「最高道徳的行動はすべて頭は蛇のごとく小なれど尾は竜のごとく大きいのであります」(⑨379)、「人心の開発救済の結果の永久性と末広性とを有することを開示するのであります」(⑧297)。

以上述べたとおり、我々は道徳の実行が短期的、長期的、精神的、物質的、社会的にも極めて大きな効果をもたらすものであることを確信し、自他の幸福、世界の平和の実現のために邁進していかなければならない。そこで我々は、広池博士がイエス・キリストについて「キリスト教の信仰の帰着点は悔い改めて改心をなし、キリストが全人類の罪を贖うために死せしことを感謝しつつ、その力に信頼して安心を得ることにある」(⑤108)と述べているように、広池博士に信頼して、最高道徳の実行に勤しむのである。